

2) アユの冷水病、シュードモナス病の発生状況

山本充孝・二宮浩司

【背景】近年、アユ養殖場では冷水病やシュードモナス病が多発し、大きな被害を与えている。

【目的】両疾病に対する疫学調査を実施し、発生条件の検討を行い、養殖場での被害軽減のための基礎資料を得る。

【成果概要】

平成9年アユ年度（平成8年11月～平成9年10月）の魚病診断カルテを取りまとめた。

1. 発生状況：冷水病、シュードモナス病ともにほぼ周年発生した。

2. 症状

①冷水病：鰓・内臓の貧血が主な症状であり、躯幹や尾部に潰瘍を示すものも多かった。

その他、下顎に出血や潰瘍症状を示したり、出血性の腹水貯溜を示すものもいた。

②シュードモナス病：主な症状は出血性の腹水貯溜と鰓の軽い貧血であり、その他、内臓に点状出血や肛門の拡張・発赤を示すものも多かった。

3. 池入れ後から発病までの日数（図1）

①冷水病：池入れ後1ヶ月以内といった早期に発病することが多かったが、90日以上経ってから発病することもあった。但しこれは、その池における2回目以降の発生と思われる。

②シュードモナス病：16日目以内に発病した事例はなかった。多くは20日目以降に発生した。

4. 飼育池の水温（図2,3）

①冷水病：大半は12.5～20.0℃の範囲で発生していた。

②シュードモナス病：12.5～22.5℃の範囲で発病したが、日間死亡率2%以上といった被害の大きな症例をみると、15℃未満または22.5℃以上での発生はなかった。

5. 給餌量：給餌過多がシュードモナス病を誘引したり被害を拡大する傾向がみられた。

6. 日間死亡率：冷水病(0.1%～20%)、シュードモナス病(0.1%～6%)の範囲で、ともにばらつきが大きかった。

7. 薬剤感受性

①冷水病：スルフィソゾール、フロルフェニコール等に高い感受性を示した。

②シュードモナス病：感受性を示す薬剤はなかった。

【成果の活用】

冷水病の場合、加温処理や投薬により被害を抑えてきた。一方、シュードモナス病の場合は治療効果のある薬剤がなく、予防に重点を置かざるを得なかった。また、飼育管理条件が被害規模を左右する傾向があった。

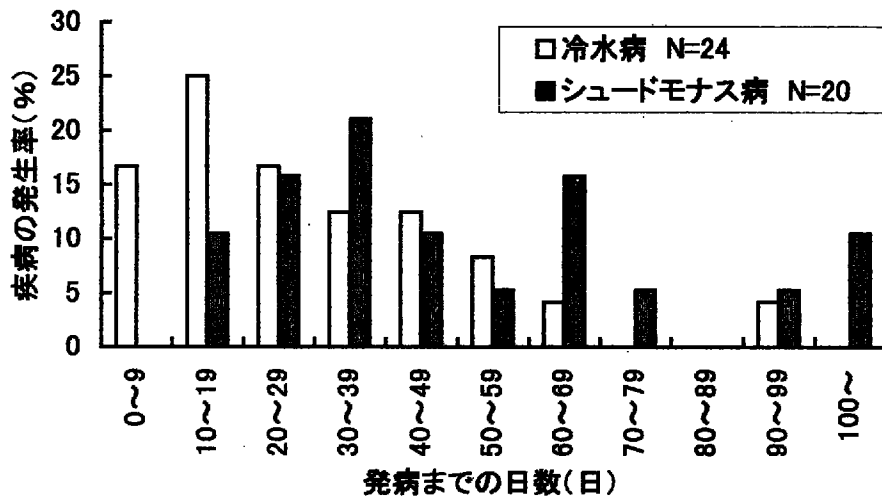


図1. 冷水病・シュードモナス病の発病までの日数別発生状況

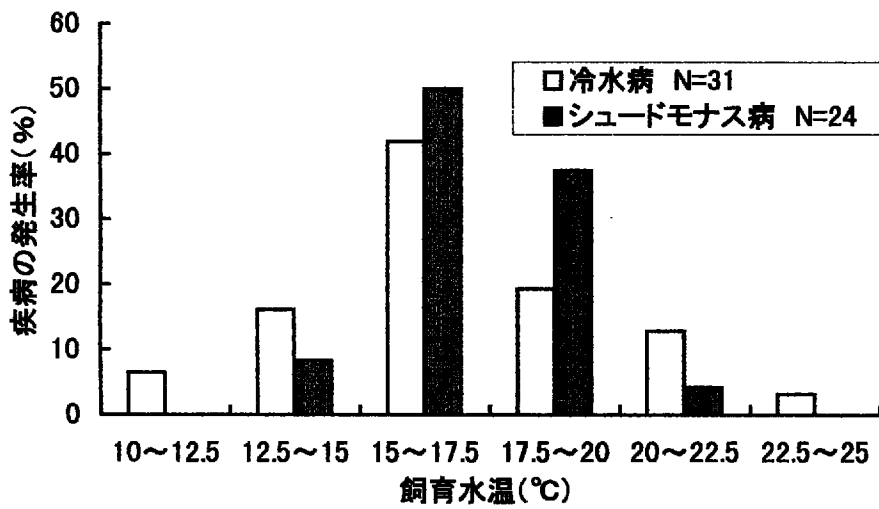


図2. 冷水病・シュードモナス病の飼育水温別発生状況

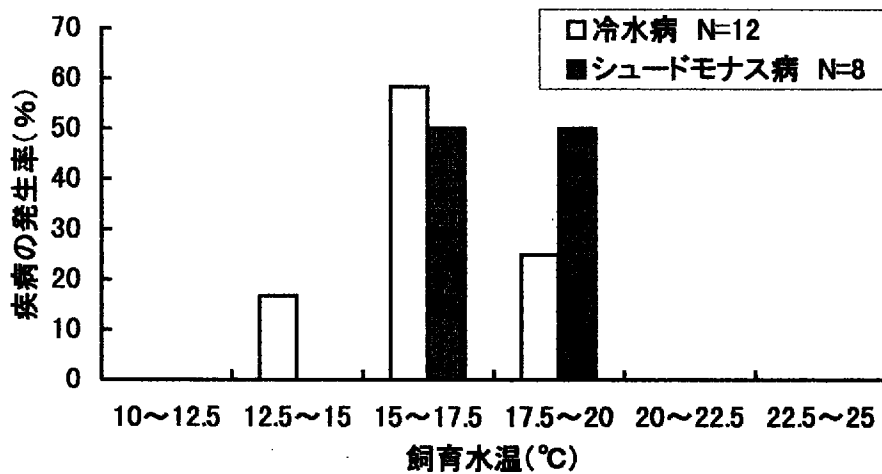


図3. 冷水病・シュードモナス病の飼育水温別発生状況(日間死亡率2%以上)